

〔寄稿〕 『共産主義運動年誌』第8号（二〇〇七年五月）

ブントと革共同との

歴史的関係について

—新左翼創成の歴史を考える—

白井 朗

『年誌』への寄稿を認めていただいたことに感謝し、この機会に新左翼運動創成期を体験した者として、歴史をできるだけ正確に記録することを心がけたい。

はじめに

革共同（革命的共産主義者同盟）の創立は一九五七年一月二十七日（最初はトロツキスト連盟。同年末十二月一日に改称）、ブント（共産主義者同盟）の創立は翌一九五八年十二月十日であった。いらいすでに五十年近くが過ぎ去り創立時の多くの人々は亡くなり、事実を正確に記録することが求められている。

先ず頭に浮かぶのは、普通の人はこの二つの団体がなぜ別々に分かれたのか、その理由は一体なんなのか、フシギに思うに違いないということである。単に二つの組織に限らず、ほとんどの新左翼セクトの相違は、普通の市民には分かりにくかったと思う。それ以上にほとんど同じ組織が何故あんなに激しく争い、ついには内ゲバにまでいったのか誰も納得できなかった。中でもブントと革共同とは、最もよく似た組織であった。

新左翼セクト間の争いは、中核派 対 革マル派、連合赤軍内部の争いの二つが最も激しく、生命を奪いあうところまで極端化した。折角七〇年安保・沖繩闘争で何万人もの結集をなすとげ、多くの人々から「新左翼の時代」と期待されたのに、七二年連合赤軍の妙義山「総括」の事件と、さらに七〇年闘争の最中に開始された中核派と革マル派との激しい内ゲバは十年間もつづき、多くの人は嫌悪感を抱き運動に絶望した。支持者を失っただけでなく、新左翼の存在そのものが市民社会から忘れられていった。

こんな残念なことが、崇高な理想をかかげて出発した新左翼世界で何故起きたのか。それは創成期の歴史とは一体どんな関係があるのか、創成期の理想とは無関係で中途から誰かが、或いはなんらかの予期せぬ力が歴史を捻じ曲げたのか。この問いに答えることが、新左翼の歴史を解くカギである。どんな組織でも「起源に本質がある」立場から組織論的に歴史的考察をおこなうとき、組織の出発時点の原形質に、その後発展した組織の問題点の根源をえぐり出すことができる。この問いには、最後に答えることにしよう。

私は新左翼運動創成期の歴史を忠実に事実を再現しつつ、新左翼運動・社会主義運動の再建のために、いくつかの論点について意見を述べたい。

最初に言っておくが、黒田寛一『日本の反スターリン主義運動』（1、2の二冊。六八年・六九年）の総括方法は、何の役にもたらず有害だということである。自分の正統性を証明する目的で超主観主義で現実の歴史を裁断し、自分の執筆した文書がすべて実現された、そうでない場合は反対派か他党派の邪悪な妨害によるとする方法は最悪である。これでは、かの悪名高きスターリン『ソ同盟共産党史』と変わらない。

私は、運動の過程に生きた個々の人間をできるだけ具体的に描きたいと思う。崇高な理想を目的として行動するかな新左翼セクト、とくに中核派と革マル派を虜にし、またポイントも例外ではなかったのか。この解明は必ずしも十全ではない。

私はこの問題を、単に革共同・中核派とポイントとの関係の歴史を考察することによって考えるのではなく、日本共産党の五〇年分裂にまで遡って考える必要を感じる。

何故か。日本共産党・スターリン主義から決別し、独立した組織を創成した新左翼運動には、ポイント・革共同だけではなく、最盛期には五流十三派（五流とは革共同系・ポイント系・構造改革派系・毛沢東派系・社青同系）もの党派があった。その源流をたどるとき、どうしても五〇年分裂にいきつかざるを得ない。

一九五〇年いらいスターリン主義的制約を脱した独立した知性を持つ批判的共産主義者は、実に十数万人にも達したと推定される。これは途方もない数である。その最先端の人々は、五五年六全協いらい革命運動再建に力を尽くし大きな成功を収めた。その潮流こそが五〇年代末の新左翼へと向う時代の流れを創った。この歴史的事実を認識できない人は去るべきである。こうした批判的共産主義者（批判的とはこの場合社会主義革命をめざす意味）のグループが一つの団体にまとまることはかなわなかったとしても、ゆるやかな連合を形成して、共産党に代わる新たな組織をいかにして創成するのか、綱領問題から組織論にいたる論

の如く見えても、実際には人間臭い感情、その最たるものとして権力欲・権力エゴイズムが、政治的人間をつき動かす場合が多い。政治的に重大な行為が、まさに「俗情との結託」を基礎とした権力主義によってなされるのである。

一九五〇年代末の新左翼運動創成期当時、滔々たる「左翼への流れ」が日本共産党や周辺の学生・青年労働者の心ある人々を捉え、まさに疾風怒濤の時代を創り出したことは、日本の歴史に記録されるべきことがらである。長年のスターリン主義の官僚主義・反知性主義・右翼日和見主義の制約と弾圧にウンザリしていた多くの青年学生は、新左翼運動に大きい希望を見出した。それは今思い起こしても素晴らしい希望の時代であった。

あれから五十年、この希望はかなえられたのであろうか。革共同・中核派もポイントも成功したとはとても言えない。革マル派にいたっては、論外である。一体何故半世紀にもわたる何万人もの活動家の血の滲む努力が実らず、逆に衰退し、日本共産党に代わる新しい労働者党を創成するのに失敗してしまったのか。

内ゲバの悲惨が七〇年安保・沖縄闘争に結集した数万人もの人々を失望させ、七〇年世代・全共闘運動の大きさにふさわしい影響を全共闘世代が社会に維持・拡大していくのを妨げたことは、否定できない。これは、現在多くの人々の同意を得ていると思う。何故そんなセクト主義が多くの人々点について、友好的に気長に粘り強く議論し一致点を探っていくための目標に向って、何故努力を積み重ねなかったのか。三派全学連の結成と、七〇年闘争の時機には八派統一戦線さえ形成されたのだから、それは不可能と言えなかったはずである。

しかし革共同の歴史を反省するとき、反スターリン主義の先駆者であるという自負心からの自己絶対化が強すぎて、自分の党を中心とし自己の利益になる統一戦線は否定しないとはいえず、新たな党を創成するために同質の党派に接近し討論・交流・連合を追求する思想的態度を欠如していた。とくにポイントとのあいだには、その現実的可能性があったのに。

それを不可能にしたのは、レーニン主義、党組織論の必然的にもたらずセクト主義である。党指導部だけが真理を持つとするカウツキー式の「外部注入論」（自組織の指導者以外には真理を創造できないから、外部にはマルクス主義はない。ましてや研究者は非実践的だから混乱をもたらすだけだ）、それを組織的に押し通すための中央集権制、その邪魔が入らぬよう黨員と外との遮断（他の党派や研究者等の「非実践的理論」にかぶれぬため。また党外の労働者・農民の革命的高揚が党をのりこえたとき指導部の権威が失墜するため、その影響を防ぐため）のための規約第一条、こ

の三点こそ、五〇年分裂らしい批判的共産主義者の結集を妨げた最悪の要因である。

共産党から追放された批判的な人々も、依然として共産党と同じセクト主義組織論に囚われつづけ、共産党を越える人間的度量の大きさをもたなかったことが失敗の原因であった。とくに中核派のセクト主義が災いした。共産党は独立した知性を持つ人々を次から次へと追放して、思想を欠如した組織統一によつて議会主義的に肥大化してきた。他方新左翼は独立した知性を持ちマルクス主義の探究をつづけてきた人々が多数いたにもかかわらず、その知性を生かせなかつた。思想の深化のための長期にわたる持続的努力と組織的行動の統一を矛盾なく遂行する方法、学問的に追究するための組織外の研究者との協同志向を持たなかつたからである。気長に同志的に討論していけば大きな統一が可能なのに、小さい論点でも見解の差異はただちに組織対立と争いを生み、セクトの分裂に結果した。革共同がブントを中間主義と罵倒したことは、その一例である。自分だけが反スターリン主義で、ブントはスターリン主義を脱却できないとの非難である。だがこの非難は誤りであることはすでに証明された。

以上の視点からブントと革共同の関係をヨリ広い視野と大きい射程の中に捉え、そうした批判的共産主義者の問題を集中的に表現するものとして考えていきたい。

故革命に決起しなかつたのか」と本質的批判を提起、だがすぐ除名され全国的な分裂にはいたらなかつた。

五〇年分裂とは、五〇年一月にコミンフォルムによる野坂理論批判が突然おこなわれたのを契機に、中央委員会の徳田・野坂ら主流派の「民族解放民主革命」の右翼日和見主義路線に批判を持ち、異議を唱えた多くの批判的共産主義者・国際派が、五〇年春に追放されたことをさす。分裂はまさに全組織を真っ二つに割る深刻なものに発展した。国際派が多数を占めたのは、中国・関西・東北の三地方委、東京都委ほか多数にのぼり、大衆団体では新日本文学会・婦人民主クラブ・全学連中央の黨員グループ、都内の学生細胞等であった。なかんずく最も活発な全学連は、反帝国主義をかかげて五〇年レッドパージ反対闘争に勝利した。この意義を没却してはならない。文学者の活動も大きかつた。

今日にいたるまで新左翼世界では、五〇年分裂の歴史的意味、新左翼組織の創成にどんな関係があつたのか、深い研究がなされておらず、歴史的意識が共有されていない。共産党はスターリン主義だから、当然自分たちは無関係であると思われている人が多い。だがそんな歴史の忘却は、自分自身の存在意義をも認識不能にする。五〇年分裂は五五年六全協を生み出す歴史の起点となり、六全協が生み出したいわばマルクス主義ルネサンスとも言うべきイデオロ

次の論点に絞つて考えたい。第一に、反スターリン主義の先駆者を自負していたはずの革共同指導部において、自分たちが昨日まで属していた日本共産党・スターリン主義の歴史と組織論の反省を欠如させていたこと。第二に、かの一九五八年六・一事件からブント創立にいたる五八年の決定的時機に革共同・探究派は、一体何をしていたのか率直・真摯に反省すること。第三に、六一年の革共同によるブントの吸収は何であつたのか。黒田寛一組織論のスターリン主義の本質的批判。この三点を中心に創成期の歴史を考えていきたい。

日本共産党の五〇年分裂の意味するもの

私がここで五〇年分裂をとりあげるのは、以上の第一の論点にかかわるからである。戦後の世界中のスターリン主義の歴史において、五〇年分裂は最大の規模と深さを持つ分裂であり、スターリン主義の本質的問題性を照らし出そうとした歴史的事件であつた。「フランス共産党において五〇年代初めに政治局員アンドレ・マルティ（ロシア革命への反革命干渉戦争に出兵したフランス海軍黒海艦隊で革命に共鳴し反乱を組織したリーダー）」とシャルル・ティヨンが「レジスタンスで圧倒的な指導権があつたのに、何

ギ―状況こそ、新左翼誕生の土壌となつたのである。

しかるに当の新左翼指導部（中核派政治局）の中には、

自分が経験したはずのかの有名な一九五八年六・一事件や、当時の共産党・東京都委員会（武井昭夫・野田弥三郎・安東仁兵衛らの反対派が多数を占めた）の中央・宮本顕治批判に果たした先鋭な役割をすっかり忘れてしまい、当事者自身の風化と墮落が支配的である。「都委員会は革命党の規律を守らぬケシカラン日和見主義者（清水丈夫。共産党は革命党だ）」とか、「共産党は（五一年五全協の）武装闘争路線を捨てるべきではなかつた」（本多延嘉。六全協は右翼日和見主義）とか、およそ信じられぬ発言がなされて、私は愕然としたことがある。まさに「過去を記憶しないものは、みづからそれを繰り返す運命にある」（サンタヤナ）。スターリン主義を批判せずに反スターリン主義はあり得ない。共産主義運動に発生する健忘症は、運動発展・再生の最大の敵である。何故健忘症が生じるのか。それは、自己の生まれてきた土壌の歴史を忘却した方が、指導部権力維持に有利と思ふ権力主義から生じる。自分がすべてを創始したとする歴史の偽造によつて指導部権力を飾ろうとする権力主義者がいかに多いか。中核派の場合には戦術極左でスターリン主義を克服できる夜郎自大が思想喪失を生み出し、歴史の忘却を生み出した。

反スターリン主義の立場に立ったはずなのにスターリン主義組織論について無反省とは、具体的に何をさすか。それは五〇年分裂がコミンフォルム批判なる野坂への突然の死刑判決のごとき非難によって分裂を促進しておきながら、五一年にはスターリンじぎの裁定によって、思想的討論をヌキに国際派に所感派への理不尽な屈服を物理的に強制した事実は無知であり、眼を塞いでいることをさす。各国共産党は組織問題にかんして決定権を持たず、「全知全能のモスクワ」に追従する、この組織論を批判することを怠ったのである。

コミンフォルムの正式名は、「欧州共産党・労働者党情報局」である。資本主義国の共産党はフランス・イタリアの二つだけで、モスクワが万能の決定権を持っていた。日本共産党は非加盟で冷遇されており、野坂への非難はまったく突然の衝撃であり、およそ共産主義者の同志的な批判とは無縁であった。

その批判とは、野坂が唱えていた「アメリカ占領軍は、日本に民主主義をもたらした。よって平和的に占領下において革命を達成できる」とした戦後共産党の戦略にたいする批判であった。四七年二・一ゼネスト中止に見られるように、アメリカ占領軍の反動性は明らかになったのに、なお野坂理論が維持された。野坂は誤りだが、コミンフォルム批判はソ連外交政策のジグザグのツケを各国共産党にま

の認識不足を一国の総理が平然とさらけ出す。女性を軍が組織的に拉致しレイプする行為について、被害者が公然と名乗りをあげ数十年間も糾弾しているのに、国民として恥ずかしいかぎりである。十五年戦争当時の天皇制専制・軍部独裁のもとで、万一軍部を批判したなら日本国民はすぐに処罰された。ましてや朝鮮人は植民地支配下にあり、自由な声などあげたなら生命さえ奪われたことに安倍は認識しない。流石に満州国総務庁次長（副首相）・岸信介の孫ではある。また敗戦時に占領軍に見られぬように都合の悪い政府・軍の資料はすべて焼却され現存していないため、慰安婦の資料も少ない。自分が資料を抹殺してにおいて、証拠がないとは何ごとか。だが証拠は東京裁判において、アジアの占領地各国において多数集められているのだ。

安倍に限らず、戦前・戦時下どんなに息のつまる不自由な社会であったか、その歴史を学ぼうとしない新左翼活動家も沢山いる。そういう歴史の無知が憲法の価値を認識不可能にし、改悪反対闘争への決起を妨げている。「過去を記憶しないものは、みずからそれを繰り返す」。中核派は「護憲ではない改憲阻止を。プロレタリア革命としてたたかえ」と途方もない空論を主張している。中核派は護憲勢力ではない。闘争の妨害者である。

その意味で戦後民主主義のもたらした共産主義運動の自由を、われわれもしっかりと認識した上で野坂批判をおこ

わしただけであった。一九三九年にスターリンはナチス・ドイツと独ソ不可侵条約を締結したが、四一年にはヒトラーの侵略に直面し一転して「民主主義米英」との同盟に走り、戦後も持続しようとしたが、不可能になり「米英帝國主義非難」にまたまた無節操に転換しただけの話であった。

今安倍政権のもとで憲法改悪が企まれているとき、戦後憲法のもとで育ってきた若い世代の多くにある戦後民主主義の価値の無理解は改憲阻止の障害をなす。そのため若干の注釈が必要と考える。死刑条項を持つ治安維持法のもとで非合法態勢下にたたかってきた日本共産党の幹部たちが獄中十八年もの自由剥奪から一転して解放され、或いは野坂のように亡命先から帰国して大歓迎され、時代の脚光を浴びる時代に入ったその喜びは、元々憲法のもとで物心ついたときから基本的人権を保障され自由がある時代に生きてきた戦後世代にはなかなか理解しがたいところがある。

時代には時代特有の精神的価値が支配的である。それを学ぶのが歴史を学ぶ意味である。たとえば現在問題の従軍慰安婦の「強制性」の否定議論で、安倍総理は三月二十七日朝日新聞夕刊で時代認識の恐ろしい欠如を暴露している。「慰安婦として拉致されたのなら、何故横田めぐみさんのように声をあげなかつたのか」と。声を上げて騒いだ記録がないから、拉致などはやっていないはず。こんな歴史

なうべきだと思う。憲法の保障する民主主義的権利のもとでの労働組合運動・学生運動・市民運動の大衆的展開をいかに実現していくか、その方法を真剣に考えるべきである。この答えをしっかりと出しておき共産主義者として野坂批判は完結する。

スターリン主義組織論の犯罪性

コミンフォルムのこのやり方は、レーニン・コミンテルンに起源を持つ。ヨーロッパで最も革命的であったドイツ・プロレタリアートのエネルギーを独自の指導権を否認して抹殺したのは、レーニンである。ローザ・ルクセンブルクが「いまだ一国でしか革命が勝利せぬ時期に国際組織を創成すると、ロシアの党と国家の利益を中心に運動する必然性があり、ほんとうの国際主義的組織にならないから創成に反対」と批判したことは、完全に的中した。コミンテルンは「大口シア民族主義の共産主義的粉飾形態」にすぎない。

コミンフォルム指導なるものは、あまりにも不自然で人情を無視している。一所懸命にたたかっている共産主義者の同志を、はるか彼方の外国から事情をよく知らぬくせに突然「マルクス・レーニン主義とは縁もゆかりもない」な

どと死刑判決を下す。そして無批判に追隨させられる。こんな方法で共産主義者がその国・民族に根をおろせるはずがない。

コミンテルンが一九二七年に山川イズムと福本イズムとの論争を双方ともダメと判定し、日本の革命運動の自立性・自律性を破壊した時から戦後にいたるまで、モスクワは国際共産主義運動を破壊する役割しか果たしていない。コミンテルンさえ無ければ、一九二〇年代の中東イスラーム世界の革命・ドイツ革命は必ず勝利していたと私は確信している。世界革命を敗北させた責任は、レーニンにある。

個々の民族の革命運動の方針決定は、その民族の革命家にまかせ独立性を尊重するのが当然である。マルクス主義は本来そういう思想である（一八八一年十月二十五日・エングルスからベルンシュタインへの手紙）。

コミンフォルム批判への最初の反応は、徳田書記長ら政治局多数派の批判に反対して、「コミンフォルム論評についての所感」を発表した。このため所感派なる名称が生まれた。だが中国共産党の再度の批判で、理論的に屈服した。反対派は中央委員会内では宮本顕治・志賀義雄・神山茂夫らで、国際批判に忠実な態度を採ろうとしたために国際派と呼ばれた。文学者の花田清輝・大西巨人らも国際派であった。たたかいにおいても、綱領理論においても最も先鋭であったのは、言うまでもなく全学連の学生共産主義者で

裂していった。

国際派は臨中によって組織外に追い出されたので、統一回復のための組織として「統一委員会」を組織し、自分たちこそがコミンフォルム批判の真髄を理解し実践しているから、必ず国際派を日本共産党の主流として国際的に認知されるに違いないと信じていた。自分たちは分派ではない、先に分裂したのは所感派の方だと主張し、分派と呼ばれることに極端に恐怖していた。だから綱領を創るのは分派になるからと、統一のための連絡だけだとしていた。分派と呼ばれるのが、なんと言われようが正しい綱領を創って革命運動をたたかおうと主張したのは、野田弥三郎の共産主義者団とかの福本イズムの福本和夫派・統一協議会の二つのグループだけだった。ちなみに私の母校法政大の国際派は福本派であった。

五〇年六月にはスターリンと金日成による朝鮮戦争が始まり、情勢は緊張した。そして国際派の願望に反して五年には所感派が正しいとする判定が下され、「党の無謬性・唯一前衛党主義」信仰のため、国際派の人々はムリ無体到自己批判させられた。それは悲惨な精神的屈服であった。何千何万人もの党員は、イヤになって戦列から離脱していった。分裂直前には十五万人の党員がいたというが、六全協当時は『アカハタ』は三〇〇〇部であった。私も六全協までイヤな数年間であった。宮本らは実権のない本部勤務

であった。

綱領論争の最大の対立点は、国際派のとくに若い全学連の活動家の中では戦略的には社会主義革命に近づく傾向を見せたのたいして、所感派はブルジョア民族主義の民族民主革命であった。現在でも日本は敗戦帝国主義としてアメリカ帝国主義に従属的位置にあり、独立しているとは言えない。それゆえ独立を主張することが全面的にナンセンスではないが、所感派の民族民主革命とは日本を帝国主義と見なすことを拒否し、植民地と同じと見て反帝（帝とはアメリカ）闘争の内容は反封建闘争（農村の半封建制残存を時代錯誤的に主張）にあるとし、実質的にアメリカ帝国主義と日本資本主義との闘争を避けた点に誤りがある。

また国際派は論争を民主主義的に党内で展開し、党員と支持者のエネルギーを汲みとろうとした。だがこれにたいして所感派は醜い権力主義で批判派を左遷・追放・除名し、「反党・反革命分子」と弾劾して恐怖政治を創り出した。

しかも所感派は勝手に非合法態勢に入り、国際派を合法態勢に置き去りにしたまま組織的連絡を断ち、臨時中央指導部（臨中）と呼ばれる機関を設立し、専ら国際派追放の仕事に請け負わせた。彼らは本部と機関紙を掌握したため国際派を分裂主義者・トロツキスト・チトー主義者と罵り、大半の不勉強な党員は事大主義（大に事一つかゝる）、権威主義から無批判的に追隨した。こうして全国の組織は分

員として冷遇された。武井昭夫や新日文の少数の文学者だけが自己批判を拒否し、信念を貫いた。

この五一年綱領（新綱領と呼ばれた）は短文にしてお粗末のかぎりであり、私は一読して怒りよりもあきれてしまった。当時の綱領論争は三〇年代資本主義論争の再版の側面があり、最も高い水準に到達したのは、戦後農地改革が半封建的寄生地主制を解体したのか残存したのか、の論争であった。何故この論争が重大な論争になったのか。それは当時のマルクス主義のレベルでは、まだ帝国主義論にもとづいてプロレタリア革命だけが資本主義以前の生産関係の搾取をも止揚するというトロツキー理論ないしレーニン「四月テーゼ」理論がなかったために、半封建制が基本的に残存していればブルジョア民主主義革命、消滅していれば社会主義革命という基本戦略にかかわる問題であったからである。もう一つの論争点は、日本のアメリカ帝国主義にたいする従属の評価であったが、この領域では当時はまだ帝国主義論の研究が不足していたため、高いレベルには達しなかった。

農業経済学の領域では、国際派の栗原百寿の著作など、現在でも学ぶに値する高い学問的達成が見られたのに何一つ言及することもなく、ただお題目の如き文が並べられ「反封建闘争は反帝闘争の柱」とされ、民族民主革命戦略が押し付けられた。これはまきれもなく、反知性主義とアンチ・

それは当然の結果だと考える人もいた。革共同創立後の新左翼のようにお互いに公然と政治的な目標を主張して党派闘争を正面から争う、これが可能になったのはまさにスターリン主義の唯一前衛党主義を新左翼がのりこえた五八年秋「左翼への転換」いらいということ、そもそも当初から理解していない。

所感派は日本を機械的に中国と同じ植民地と見なし、武装闘争・かの悪名高き火炎瓶闘争を推進したが、まったく支持されず党勢は低下の一途をたどったために、五三年スタールン死後ソ連に滞在していた袴田里見が意見を上申し、火炎瓶闘争の中止と旧国際派黨員の自己批判ナシの戦列への復帰等をモスクワや野坂と協議して決定し、これが前触れなしの突然変異と私たちには感じられた五五年夏の六全協となって日本にもたらされた。

前衛党の無謬性をただひたすら信じていた黨員は六全協決議の「党も無謬ではなかった」意味の文言に愕然とし、かなりの人が「六全協ノイローゼ」と言われる活動停止に陥った。

六全協後まもなく宮本顕治は党指導部の実権を握るが、彼は所感派を組織的基盤として権力を創り、国際派の戦略的見解を放棄、社会主義革命論を抑圧するにいたる。

六全協のもたらした所感派指導の五年間の全面否定と、ひきつづいて五六年共産主義の総本山・ソ連共産党の二十ラーになったにもかかわらず、これまた一挙に権威失墜していったことである。

単に日本共産党の権威が失墜しただけではなく、クレムリンの神話の崩壊はその呪縛からみずから解放するチャンスであった。若き共産主義者はコミンテルンと日本共産党の歴史と理論の全面的再検討、従来非正統派的の見なされてきた宇野経済学・主体性論の梅本哲学・対馬忠行のソ連論等々を短時日に真剣に学んでいった。中でも黒田寛一の『探究』誌はよく読まれた。津田道夫氏の『現状分析』誌も、国家論の視点からスタールン批判を深化しようとしていた。

五六年ハンガリア革命は、さらに大きな衝撃を与えた。「社会主義国」で労働者・市民が武器をとって決起したのを戦車と戦闘機で虐殺するソ連は、果たして社会主義なのか、深刻な疑問が共産黨員を捕らえて離さず、良心ある黨員は混乱し大混乱に陥った。本多延嘉も私もこのハンガリア革命に直面して、スタールン主義からの離反を開始した。私は当時、共産党法政大細胞責任者であり、ソ連共産党二十回大会のもたらした国際共産主義運動の再検討の気運と、スタールン粛清の暴露を大いに歓迎したが、フルシチョフの「先進資本主義国では平和革命可能論」のお粗末さに到底賛成できず、あきれてしまった。細胞指導部でこの問題について率直に疑問と批判を提起したが、数人の同志は全

回大会でフルシチョフがスタールン批判によって大量粛清を暴露したことは、異常な興奮を全社会的に生み出し、マルクス主義ルネサンスと言えるイデオロギー状況が現出した。単に日本共産党所感派が誤りを冒しただけでなく、ソ連共産党もたいへんな誤りを冒し、多数の革命家のいのちを奪い、数千万人もの途方もない人数の無実の市民を粛清した事実を知ったことは、反革命分子として禁圧されていたトロツキーの再検討と研究の開始、ロシア革命とソ連の歴史、コミンテルン史の再検討をも大きく促した。現代思潮社がトロツキー選集の刊行をはじめたことは、新鮮な感動であった。

イデオロギー状況の劇的な変化の中で最も印象深い事例を二つあげる。五三年から刊行開始された岩波『日本資本主義講座』全十巻は、全国のマルクス主義系学者を総動員した講座だったが、所感派戦略（日本民族のアメリカへの植民地的従属論・農村の半封建制残存論・戦後改革の無意味さの強調）の低級な敷衍・解説であったために、いっぺんに権威を喪失し誰もかえりみないソツキ本に転落した。もう一つ、五二年スタールン論文「ソ同盟における社会主義の経済的諸問題」が「発明」した「価値法則は商品経済の法則。資本主義の法則は剰余価値法則」という『資本論』破壊のベテンを敷衍解説したソ同盟科学アカデミア編集『経済学教科書』全四冊が大衆的学習運動でベストセ

員私に賛成した。

当時はすでに結成されていたトロツキスト連盟の機関紙『世界革命』が経済学部自治会宛に十部づつ毎号送られていた。私は「トロツキーにかぶれる者が出るとイカン」と考えそれをすべて持ち返った。だが破棄はしなかった。五〇年分裂の経験から対立者の見解を読んでからでなければ批判はできないと考え「そのうちに読もう」と思っていたのだ。

ところが私の属していたサークル・歴史研究会の会員に、黒田寛一の「弁証法研究会」に参加している人がいることを知って、「マズイ。トロツキーを批判しなきゃ」と決心し、当時刊行されていた山西英一訳・トロツキー『ロシア革命史』を入手して読み始めた。読み進むや、今までトロツキーについて散々言われてきた膨大な非誹・中傷はすべてデマゴギーだと分かってきた。とくに感銘したのは、レーニン四月テーゼによるボリシェビキの社会主義革命戦略への転換である。同じ箇所をスタールン『ソ同盟共産党史』を熟読したはずだが、なんにも理解できていなかったこと、元々理解できない書き方になっていたことがはじめて分かった。

ここまで勉強をして、私は『世界革命』編集部の手紙を出して太田龍氏に面談を申し込んだのである。五八年三月四日であった。太田氏と飯田橋の喫茶店で五時間くらい話

し込んで、トロツキーの革命性に改めて打たれた。そして
法政大細胞指導部でのフルシチョフ批判の空気を伝えて、
しっかりと落ち着いて討論していけばみんなを獲得できる
との見通しを話した。私はその場で革命的共産主義者同盟
に加盟したのである。

ところがそれからのちに、革共同の真髓に触れることにな
った。守田典彦先輩が太田氏との面談の直後にやってきて、
「黒田寛一に会うように」と話しをした。先輩も同席して
三月末に黒田に調布市の自宅で数時間話しを聴いた。そ
の際手書きの「KK（黒田寛一）とKT（栗原登一）大田
龍」の対立なる短文を見せ太田氏のトロツキー教条主義
にたいして、トロツキーの反スターリン主義に踏まえつつ、
マルクスに帰って革命的共産主義の思想と運動とを根源的
に創造すべきだと彼は力説した。私は黒田の立場と思想に
魅力を感じて、ただちに黒田の弁証法研究会・探究派に参
加を決意した。

黒田寛一の創成期的功績

『探究』は黒田寛一が五七年二月に発足した弁証法研究
会の雑誌で、同年十月に創刊号が刊行された。五八年一月
に第二号刊行、「日本革命綱領の問題点」特集で守田典彦先

も社会主義になり、この二大國がまさに「東風が西風を圧
倒」して全世界の社会主義化はもうすぐとの期待が支配的
だった。このときにスターリン批判からハンガリア革命へ
とソ連の権威失墜と社会主義の理想の動揺は、多くの真摯
な若い共産党員を根本的な社会主義の反省と再検討に駆り
立てた。何よりも左翼的知識人がハンガリア問題について
は完全な沈黙を守り、一体どのように考えたらよいのか、
人々は混乱した。共産党も自分の判断をまったく示すこと
ができなかった。

この情勢に「ハンガリア革命断乎支持」と黒田寛一が声
を上げたのは、見事に「コロンブスの卵」の役割を果たし
た。「ハンガリアで労働者を虐殺するソ連は、もはやいかな
る意味でも革命的な労働者国家ではあり得ない」との立場
から、『スターリン主義批判の基礎』（人生社）の末尾に十
月二十二日に追記した文言「ハンガリアの労働者階層がた
ちあがったことは、二〇世紀の共産主義運動における画期
的の大事件として、歴史に刻み込まれるであろう」は、真実
の社会主義を求めて煩悶する若い共産主義者に新鮮な感動
をもって迎えられ、『探究』創刊号の黒田論文は、いっそう
問題を深化し多くの人を捉えた。さらに五七年五月翻訳・
刊行されたハンガリア人ジャーナリスト・フェイト『民族
社会主義革命・ハンガリア十年の悲劇』を私もむさぼり読
んで、ソ連の大ロシア民族主義的抑圧・基本的人権無視の

輩が「或る日共党員の自己省察」をペンネームで投書され
ている（だが黒田は、守田先輩の革共同加盟の意味を理解
しなかった。後述）。九大第二分校で五〇年レッド・パージ
が九大でたまたかいつづけ、五六年ハンガリア革命支持を訴
え熱烈な討論の末に九大細胞の多数を獲得した先輩は、早
くから『探究』に注目し、弁証法研究会・革共同に加盟し
た。そして私も先輩が度々上京して話しをしてくれる影響
で反スターリン主義の思想に接近した。私は『探究』二号
から入手して読み始めていた。創刊号はのちの連れ合いが
すでに入手していたので、借りて読むこととなった。創刊
号の黒田のハンガリア革命論は、現在でも新鮮な感激を呼
び覚ます。第二号の「人間万歳」で締めくくられる論文「世
界革命の基礎理論」を熟読して探究派理論を私は理解し始
めた。探究派理論は、多くの先進的な学生党員の心臓に訴
える思想であり、鮮やかに浸透していった。

ここで黒田寛一の反スターリン主義運動の創成に果たし
た役割を客観的に考えてみよう。

まず彼の歴史的功績としてハンガリア革命の意義の賞賛
がある。当時のハンガリア革命の凄まじい衝撃は経験しな
い人には理解しがたいものがあり、社会主義の権威が地に
落ちた今日では想像を絶する。当時はソ連につづいて中国

粛清と恐怖政治に憤激を覚え、スターリン主義は打倒すべ
きだと認識するにいたった。

黒田寛一の反スターリン主義創成期に果たした役割は、
このハンガリア革命を労働者の革命として承認し、ソ連の
反革命的墮落を痛烈に批判したことが第一である。第二に
マルクス『経済学・哲学草稿』の人間主義を、マルクス主
義思想と理論との根本的立場として復権したことである。
従来の正統派マルクス主義が戦後のマル・エン選集の編集
に見られるように、『経哲学草稿』をマルクス主義成立以前の
未熟な思想として補巻に扱っている点を、黒田寛一は批判
して人間主義こそマルクス主義の原点であることを強調し
たのである。

黒田の弁証法研究会に参加して、『経済学・哲学草稿』の
人間主義を基礎として哲学を構築していくべきだとする思
想に始めて触れたときの新鮮な感銘を忘れることはできな
い。それまで哲学といえば、ソ連式の『唯物弁証法教程』
などで無味乾燥な「本質と現象・形式と内容」等々の干か
らびた字句解釈しか知らなかった私には、多大の感銘であ
った。

だが黒田の功績はこの二点のみに限られ、同時に重大な
誤謬をもち込んだ（後述）。

私が革共同として活動を開始したのは、AGが五八年五
月末の大会で社会主義学生同盟に転換したときである。五

七年頃からAGでは東京での大会や全国委員会での討論のたびに、自治会代表者の会議である全学連の会議とは違って、革命論議を真摯におこない若い共産主義者が育っていた。これは黒田寛一創刊にかかわる『探究』のイデオロギイの影響にはかならない。「スターリン主義的平和共存のための平和擁護闘争」ではなく、「世界革命戦略にもとづいた帝国主義に反対する反戦闘争」という論議が、社学同への転換の意義であった。黒田寛一は『探究』第二号（五八年一月刊行）に「反戦学生同盟の諸君へ」を執筆し、帝国主義の戦争政策に反対する反戦闘争の先頭にたつことこそ、AGの本来の任務だと訴えた、その影響は大きいものがあった。

五八年春の大会では、ほとんどの参加者が社学同への転換には賛成だが、執行部（中村光男委員長・鈴木啓一書記長。鈴木はのちに革マル派・森茂）は、なおも「世界革命と平和共存が平和共存」的な意識であった。まさにその点を衝いて、スターリン主義の平和共存戦略がプロレタリア世界革命の裏切りであると説き明かし、反スターリン主義の立場から世界革命の意義を論じて批判したのが、私の大会での発言であった。守田典彦先輩も大会を傍聴していた。この私の演説が執行部によって受け容れられて初めて社学同への転換が実質的意味のある内容になったのである。ここから勤評反対闘争・警職法反対闘争をたたかつて全学連

は転換していく。

この直後に全学連大会が開かれて、のち構造改革派的立場に立つ右派と主流派との衝突が起こり、さらに衝突解決のための党員グループ会議が六月一日に共産党本部で開催されて、党中央委員会と全学連指導部党員との全面衝突が六・一事件となつて勃発する。

六・一事件は共産党中央・宮本顕治指導部と対立をつづけてきた東大細胞と全学連指導部の「別党コース」を促進するにいたる。すでに東大細胞では六全協後の全学連再建とマルクス主義ルネサンスのもとで、指導的党員はトロツキーをむさぼり読み、コミンテルンと日本共産党の歴史の根本的再検討に入つていた。その中で島成郎・生田浩二・佐伯秀光の三人が五七年十二月にスターリン主義では絶対禁物の分派を結成（注記）して、共産党第七回大会へ準備を進めつつあった。島氏の文言を引用すると、「当時ブントの理論は、宇野経済学と黒田寛一の哲学、トロツキーの革命論などからの剽窃、継ぎ接ぎだといわれたが、剽窃大いに結構、よいと思われたものは片端からとりこんで同化吸収してしまえ。そんな貪欲さと謙虚さをずつと持ち続けていきたい」（島「ブント私史」『戦後史の証言・ブント』島監修・高沢皓司編集 四六ページ 批評社九九年）というものであった。綱領作成と思想統一は、残された大きな課題であった。

になつた記憶が鮮明である。その際、欧米ではともかく、日本では別の党なんて不可能」と廣松君は怒つて断言したが、六〇年とその後の現実を見て「可能」と分かつたと見え、六六年頃第二次ブントにやつと同調した。」

五六年八中央委・九大会いらい所感派によつて五年間も抑圧され鬱積していた学生大衆のエネルギーは適切な指導を得て大爆発し、五六年砂川基地闘争の勝利、原水爆実験反対闘争を経て大きく結集し、たたかいを抑圧する右翼的な宮本中央との対立が深刻化していった。多くの学生細胞は、国際共産主義運動の根本的再検討に進みつつあった。島氏の言うとおり、ここで大きな影響力を発揮したのは『探究』理論であつたことは間違いない。

反スターリン主義の綱領理論として、先ず確認されたのは次の点である。スターリン主義の一国社会主義論と平和共存に反対してプロレタリア世界革命を堂々と主張した点。二段階革命論に反対して社会主義革命論を主張した点。平和革命論に反対して暴力革命論を主張した点、この三点である。その前提としてハンガリア革命の弾圧を批判して、「ソ連社会主義国」を否定し、長年にわたる国際権威主義から脱却し始めたのである。

しかし全学連指導部の中では、立命館大の星宮煥生氏が当時の革共同関西派（第四インター派）の西氏の指導で「反

【注記。この分派結成に向う東大細胞の動きがあつたために、廣松君が黒田寛一・弁証法研究会に出席して、「これはトロツキスト組織創成に向う動きだ」と感じ取り、東大細胞指導部に逐一「密告」したのを、逆に東大細胞指導部が黒田寛一に通報してしまふことが起きた。新進気鋭の哲学者（卵）・廣松君ともあろう人が、一体何故そんなはしたない「密告」のマネに及んだのか。しかも彼はすでにアカデミズム沈潜のため、東大細胞に脱党届けを提出していたのに。それは彼が国際派のAGリッチ事件まで経験したのに、脱党後もなお唯一前衛党主義のクレムリンの神話から脱却できず、反スターリン主義へと時代が滔滔と流れていることに時代錯誤でいたからだ。黒田寛一は私が最初に会つた五八年三月にこのことで廣松君を弾劾していた。そして革マル派は、彼が東大闘争に共鳴して名大を辞任して上京した七〇年五月にテロを加えた。昨年三月刊行『哲学者廣松君の告白的回想録』でこのテロをブントの或る分派だと本人が語っている（一九五ページ）が、それは間違いである。ブントの誰に聞いても、当時彼をテロして利益を得る分派は一つもないし、ブントは黒ヘルで襲撃する卑怯なマネはしないと声明している。廣松君はよく誤解されるがブント創成に絶対反対であつた。守田先輩と私が五八年秋に彼を訪問したとき、「別党はモラルに反する」と激論

帝国主義・労働者国家無条件擁護」のトロツキー理論（ソ連は墮落したとはいえないおも労働者国家）の立場を採り、全学連中央執行部の人たちに大きな影響を与えていた。星宮氏はアジテーターで人気のある活動家であり、オルグ能力もすぐれていた。それゆえ全学連指導部の中の革共同と言えば、残念ながら彼のヘゲモニーのもとにあるトロツキー教条主義者を意味していた。前記の本で島氏は、関西派のこの立場をスターリン主義と同じと批判している。明らかに関西派はブントよりも右翼であった。

黒田スパイ問題と探究派の停滞

では探究派はどうしていたのか。ここでどうしても、黒田寛一スパイ事件という新左翼創成期にまつわる忌まわしい歴史をえぐり出す必要がある。

六・一事件の約二カ月後、五八年七月二十七日に革共同のいわゆる第一次分裂が起きた。全国代表者会議で革共同を正式に「第四インター日本支部」にすべしと太田氏が主張したが、「時期尚早。トロツキー教条主義反対。創造的マルクス主義の立場を」との探究派の主張によって否決されたため、太田氏が「トロツキスト同志会」を名のつて一人で分裂したのである。ところが驚いたことに、黒田の最も

忠実な弟子だった遠山（共産党中央大細胞員）がしばらくのちに太田氏に賛成して、探究派から鞍替えしてしまったのである。

それ自体は大した問題ではなかったのだが、ここでのちのちまで影響を及ぼす大事件が勃発した。遠山は、黒田寛一が弁証法研究会の最も初期の参加者である大川治郎（小泉恒彦）という共産黨員・民青埼玉県委員のメンバーと共謀して警視庁に共産党の情報をスパイとして売り渡した事実を、関西の指導部たる西京司に暴露したのである。

ここでこの時期までに探究派に結集していたメンバーをあげておく。本多延嘉・広田広（芸大出身。故人）・白井・守田典彦・北村（埼玉大）の数人であった。これより早く黒田寛一の門を叩いたのが大川・野村文教（印刷労働者）、鷲見（法政大）、遠山の四人であった。遠山が黒田スパイ事件を知っていたことは、私たち（守田先輩や本多・私などの共産党活動の経験者）が参加する以前には、黒田のスパイ事件とのかかわりが批判もされずに、遠山は平気であった証左である。それほど初期の黒田周辺は、革命運動の厳しさとは無縁であったのだ。

西氏（共産党京都府委員。学生運動担当で星宮氏を獲得）は、当然にもビックリして黒田に問い合わせたが、否定。ここから探究派の苦難の時期が開始される。最大の問題は、

黒田の事件とのかかわりを知った本多が消耗してすぐに戦線、逃亡して九月から十二月十日のブント創立大会まで、黒田を除いた探究派は、意思統一さえ不可能になってしまったことである。一体なんたることか。学生共産主義者の最も積極的なグループが大きく動いて新しい組織を創成する決定的な瞬間、反スターリン主義が広く数百名もの活動家を捉え大きく第一歩を踏み出そうとする歴史的瞬間に、思想的に先駆者であるはずの探究派同志のあいだでこんな低劣な問題が突然勃発し、逃亡者さえ出るといふのは。

これが探究派の歴史の真実である。探究派が意思統一もできないありさまだったため、全学連指導部の活動家の中では「革共同といえれば関西派（太田氏ほど硬直的ではないがトロツキー教条主義）」と見られ、残念ながらそれは事実だった。

ここで大川スパイ事件のあらましについて述べる。

一九五七年後半、大川（小泉）は、民青中央委員・常任活動家であったが、警視庁公安部の執拗な追及を受け情報提供を迫られ、生活に窮し精神的に動揺していた（彼は五七年一月に黒田を訪れ弁証法研究会に参加）。大川は悩んだあげく黒田に相談したところ、なんと黒田は即座に「そんなら民青の情報でも売って金にしたらどうだ」と返答した。二人は「対立するスターリン主義組織の情報を売っても、

トロツキスト運動にはなんらの打撃も与えない」という点で一致した。ここに黒田・革マル派の「対立する党派を打倒するためには警察と手を組むことは積極的な意味がある」とするフハイした本質が見事に露呈している。「六九年に中核派が破防法適用を受けたときに、革マル派は「権力が中核派の首根っこを押さえているときに、急所を蹴り上げる」と称して内ゲバを合理化したが、その思想は創成期からあったのだ。大川が警視庁当局と一旦約束をとりつけ、新宿駅付近で公衆電話をかけた。その際に黒田と黒田夫人が同行したのだ。大川が所定の係りに電話したが、長く待たされたため逆探知で所在地を急襲されて連行されるのではないかと、不安に駆られて電話を切つてあわてて三人は逃げ出した。だがのちに大川だけが電話をかけなおし、係りと恒常的関係を結んだ。民青中央の政策や決定事項の情報売り、また警視庁が他の労働運動・平和運動・共産党の資料を示して判断させていったところ、非常によく的中するので、優れた情報提供者の評価を得て大川は五八年前半までスパイをつづけた。黒田は大川から報告を受けて容認していた。しかし大川は精神的に消耗して、五九年には逃亡するにいたる。

事実関係は以上である。この問題の政治的特徴は、第一に黒田寛一と大川は完全に「共謀共同正犯」であること、あろうことか黒田は実行行為に参加しようとさえしたこと、

第二に大川は黒田の承認を得て初めてスパイを働いたこと、元々スパイであった大川が黒田を巻き込んだのでは決してないということ、第三に数カ月及び許しがたい階級的犯罪であること、第四に対立する党派を打倒するためには警察・権力と協力することは積極的にやってよい、と黒田寛一がそもそも反スターリン主義運動創成期から一貫して考えていたこと、この四点である。このスパイ事件は、黒田寛一・革マル派のフハイの本質を、組織創成期の原形質において明示したのである。

反スターリン主義イデオロギーの創始者たる黒田が、こんなにも汚辱に満ちた反階級的行為に手を汚していた事実が暴露され、探究派は意思統一が不可能になるような形で本多延嘉は戦線逃亡してしまうとは、一体なにごとか。私はどんなに努力しても本多とは連絡不可能であり、彼は連絡を断ち音信不通であった。こうして六・一事件から年末の十二月十日ブント結成大会まで、探究派はこの滔滔たる歴史的潮流にたいして個々人で対処する以外に打つ手を持たなかったのである。

一九五八年十二月十日ブント創立。

五九年八月三十日革共同・全国委員会創立

ブント創立よりも革共同・全国委員会創立が九カ月も遅れたことは、革共同が本来先駆者であったはずなのに、スパイ問題で革共同がブント創成に向う滔滔たる全学連フランクの潮流の中で、思想的討論を活発に組織できなかったことが災いしたためである。また革共同内部ではトロツキイ教条主義との論争において、スパイ問題に階級的なケジメをつけられぬ探究派が、綱領論争それ自体では優位にたつたとしても（ハンガリア革命のあとでソ連はなおも労働者国家だというのは説得力が無さすぎた）、階級闘争の規律無視と責め立てられ、多数獲得に失敗したため全国委員会創立にいたつたのである。大会をとおして一言も発しなかった塩川・鬼塚両氏の顔が記憶に残る。

全国委員会創立に参加した革共同大会代議員は次の六名である。本多延嘉（七五年三・一四死去）・小野田猛史（北川登・東工大。大会で探究派に参加。二〇〇六年死去）・広田広（芸大。六八年離脱。その後死去）・野村文教（印刷労働者。六一年離脱。日本共産党にとどまる）・北村文彦（埼玉大。六〇年代半ばに離脱）と白井。黒田寛一はスパイ問題で代議員権を剥奪。この七名で全国委員会は発足した。七名のうち現在生存しているのは私だけで、歴史を記録する責任を痛感する。私は本多延嘉の七五年敗北死にいたる中核派の組織論の重大な誤謬を反省し、ここにいつさいの

ここで重要なことは、上記の大川スパイ事件の内容をわれわれが知り得たのは、実はずつと遅れて六一年末から六二年初めになってからということである。五八年当時は関西指導部から問い合わせただけで、探究派にたいして黒田は全面否定したため、何一つ正確な認識を持つことができないありさまであった。それはどういう意味を持つのか。関西派は遠山から得た情報で詳しい事実を知っている、だが肝心の探究派は「何かあったらしい。黒田も関与しているようだ」という推測だけで、事実を知ることができず、これでは関西派とたたかうことは到底不可能であった。この圧倒的なハンディキャップのもとでは、反帝・反スターリン主義の立場の優位性を貫徹しようにも、「スパイ問題を不問に付すのか」という関西派の非難に勝つことができなかった。

そのために新たに革共同に加盟してきた全学連幹部の塩川氏・鬼塚氏等が、最初は星宮氏の工作で加盟したとはいえ、探究理論に興味と関心を持って私たちに接近しつつあったのに、十全に討論する余裕もないまま翌五九年の革共同大会を迎えて、探究派は敗北し元々の六名だけで退場する結果を生むこととなったのである。これが革命的共産主義者同盟・全国委員会の五九年八月誕生の真実の背景である。

虚飾を捨てて社会主義運動の再建のために真実を記録することを決断し実行するものである。

本多延嘉の逃亡と連絡切断・私を初めほかの探究派のメンバーのスパイ問題にたいする認識不可能とブント創成への統一した方針決定不可能の事態こそ、ブント創成にたいして、その情熱の渦巻く中に反帝・反スターリン主義の討論を持ち込むことをなし得ずにブント創立の十二月十日創立を迎えた真実の理由である。私は孤立して活動せざるを得なかったが、共産党法政大細胞では右翼の中央に反対する多数派を獲得し、さらにその積極的メンバーを革共同に加盟させた。本多が積極的に早稲田で活動していれば、細胞の多数派になる可能性は十分にあった。しかし五八年後半の決定的瞬間に逃亡・無活動のため細胞の多数はブント派になり、ブントという組織が創立されてから遅れて五九年以降の工作では少数派に転落した。東京の学生運動の最大の拠点たる早稲田で、本多が三カ月も無活動であったこととの否定的影響は大きい。

数年前に創成期の或る労働者同志と文通でこの当時のことを対話していたとき、彼は「スパイと分かたら、疑わしいのなら、何故すぐに黒田寛一を除名して再出発しなかったのか」と厳しく問うてきた。この批判はまったく正しいと私は現在考える。どんなに不利な状況になつたとしても、スパイ犯罪という階級闘争の規律を平気で破るような

人間が、一寸良いことを書いたからといって、指導部にそのまま残すという考え方は間違いであった。その証拠に四年・五年のちには革マル派との分裂で私たちは数年間の組織建設の半分を失うツケを払わせられ、さらに六七年からの激動期にはもつと苛酷な敵対者として中核派のたたかいを革マル派は妨害したではないか。もはや歴史が結論を出しているのである。

本多延嘉が何故逃亡してしまつたのか。現在考えてハッキリ言えることは次の点である。

第一に、彼は黒田を教条主義的に信奉し誰よりも精神的に激しく消耗したからである。彼の黒田教条主義について、私には二ガイ思い出がある。六一年頃であつたか、何かのことで彼が私を非難したついでに、「黒田が君からトロツキ―『裏切られた革命』を借りたが、山村（白井）の傍線の引き方は自分とは違う。山村はクダラナイことに關心がある。勉強の仕方が間違つていて、黒田が言つとるぞ」と発言したことがあつた。私は大いに不愉快であつた。どこに傍線を引くのか人それぞれ理論的關心の持ち方があるはずだ、何もかも黒田大先生に見習えというのか、と甚だしい怒りを覚えた。ここに黒田寛一の歴史を無視する観念史観があると私は考える。彼は人間の行為の蓄積が歴史を創ること、その重みの認識が欠けていて、アタマで考えた観念がどんなにたぐいのことであれ、歴史的事実よりも尊い

とさえ分からなかつた。所感派としての自己絶対化、常人の想像を絶する自己過信の人格であり、そのために最後に大失敗にいたつた。これが、七五年三・一四の敗北死をそのあとずつと三十年間考えつづけて私が到達した結論である。

この二点から彼は、平然と逃亡し決定的な時機を逸する行為に出たと思う。全学連の革共同メンバーは、五九年六月には執行部から降りてブントに指導権をわたすにいたり、ついに全学連指導部では革共同といえは関西派という理解を、この時点までは広く大衆的に否定することはできなかつた。元はと言えば黒田スパイ問題に原因がある。しかし黒田と決別しても革命党を建設しようという気概を欠いた本多と私の責任は大きい。

さらにもう一つ、五八年後半に探究派の守田先輩が革共同を去り、ブントに希望を見出して移行した事件があつた。これも黒田の非同情的な態度が原因である。福岡市から度々上京しブント指導部の人々との交渉にあたつていた先輩と、福岡の夫人に、黒田はなんの根拠もない誹謗・罵倒を書簡でおこない革命家としての信義否定行為に出た。それは度し難い非常識であつた。黒田は先輩が五〇年分裂いらい一貫した闘士であり、ハンガリア革命に接して独自の立場からスターリン主義批判のたたかいを開始し九大細胞の多数を獲得した、その重さを全然理解せず、ただ自分の

と見なす純粹の観念論者にすぎない。『裏切られた革命』のスターリン主義の歴史的犯罪の事実に関心を持たず、スターリンやトロツキーの理念にしか関心を持たない人格だから、私とは関心のあり方が違うのは当然である。「論理的論理ではなく、歴史的論理が問題である」とするヘーゲル以下である。それを「黒田とは傍線の引き方が違うぞ」などという本多はどうかしている。今考えて彼の組織における思想統一の方法は思想警察的統制であり、スターリン主義そのものであつたと痛感せざるを得ない。

第二に、彼はブント結成にいたる学生運動の潮流の左翼性を自己の狭い視野とセクト主義をもつてしか判断できないため、六・一事件後を決定的な時機と見なさず逃亡した。彼は五〇年分裂の「解決」後に入党し所感派独裁によって分裂の真相をまったく知らされず、無批判的に所感派に追隨していたため、六全協にたいして所感派的抵抗をつづけ、国際派の全学連が五〇年いらい激烈な闘争を展開した歴史、また六全協後にA Gが復活して五八年五月に社会主義学生同盟に転換したこと、そこで革共同の同志たる私が大きな役割を果たしたことさえ無知であつた。私は国際派についての彼の無理解と偏見を正そうとして何回も対話を試みたが、彼はトコトン逃げまくつた。信じられないが、本多は総じて学生運動に無関心で、早稲田細胞に属しながら新聞会活動だけでA Gが自治会活動家の中心をなしていたこ

理論の信奉者が一人増えたとか考えていなかった。

当時私は先輩と親しく接していて、黒田の行為は理不尽そのものであり、誰でもあんなことをやられたら同志としてはもちろん友人としても付きあえぬと考えた。大川や野村も先輩から話を聴いて黒田を強く批判し、黒田は返すことばを持たずションボリしていた。こうして守田先輩は、五〇年全学連の同志・島氏と共に歩む途を選択していった。黒田はこのときの自己の態度をいっさい反省せず、守田先輩を裏切り者と見なし六一年に復讐する。先輩は去つていく、スパイ問題に打つ手もなしで、私は憂鬱になり、とにかく法政を固めることに専念した。

この時期の総括として本多延嘉が執筆した論文「革命的共産主義運動の現段階と革命的プロレタリア党創造の課題」（『共産主義者』四号六一年九月・五号六二年一月。本多延嘉著作選第五巻掲載）に「探究派の解体的危機と全国委員会のための闘争」の小見出しで次のように述べている。

「探究派政治指導部は、太田派（トロツキー絶対主義者）との分派闘争において圧倒的勝利を収めたにもかかわらず、その政治路線と組織戦術をめぐって深刻な内部的動揺を生み出し、その結果として組織的解体状況におちいつてしまつたのである。かくして探究派は事実上、政治指導部の解体した状況のもとに、共産主義者同盟の成立

にいたる三月月の決定的期間をすぎし、諸分野における闘争は、個々の同志の孤立した指導のもとにゆだねられていたのである。／政治的指導部の事実上の責任者であり、唯一の専従でありながら……遠山は太田派と野合……遠山の傾向は、その端的段階において爆砕された。だが、こうした闘争の過程において、逆に『大衆闘争の方針など必要ではない。そんなものは全学連にまかせておけばいいのだ』という裏返しの誤謬が生み出されたのである。／同志青山到（守田典彦先輩）によって強力に主張されたこのような思想は、根底的批判にさらされぬままに生きのこり、探究派政治指導部のたちおくれを慰める子守歌の役割をはたしたのである。……探究派を代表して全学連フタクとの政治的折衝にあたっていた同志青山は、皮肉にも全学連的政治家との野合を深めつつ『個人的トラブル』を口実にわが戦列から無原則的逃亡を謀り、かくして探究派政治指導部の解体的危機を決定的なものにしたのである。』（本多延嘉著 第五巻 二九一―二九三ページ）

これは、まさしくスターリン的歴史偽造である。自分自身の戦線逃亡によってブント創立にいたる三月月月の決定的時機を潰した事実を、すべて守田先輩に責任転嫁した恥すべき文である。「個人的トラブルを口実に戦列から無原則

的に逃亡」と先輩を非難するが、自分はそのかん三月月も逃亡していたではないか。先輩は黒田の耐え難い誹謗・中傷・罵倒にたいして共産主義者として「こんな人格がリーダーでは革命党はできない」と決断してブント創成の途を選んだ。スパイを容認するフハイした人格が、先輩にどんな仕打ちをしたのか、三月月も逃亡していた本多は知ろうともしなかったのが真実ではないのか。ブント創成へと向う滔滔たる全国の潮流に、少数の探究派がヘゲモニーを握る力を持ち得なかったとしても、早稲田細胞で本多が本気になれば多数派になれたのに、それをサボった責任をどうするのか。活動家数のきわめて多い早稲田で多数を制するなら、五八年の政治状況は抜本的に変わっていたであろう。東大細胞だけではブントも自由には動けなかった。探究派とブントとの関係は、探究派早稲田細胞・法政細胞の二つの軸をもって、はるかに合理的に討論・交渉する過程を創り得たと私は考える。

本多は五九年に入ってから出遅れたため早稲田で少数派に転落し、ブントに遅れをとった。それを「守田先輩がブントに加担したからだ」と言う。何をか言わんやである。私の法政ではブントは存在し得なかった（六〇年になってから漸く支部ができた）。私は、ブントのメンバーにはAGの友人が多く、いずれ合流できると確信していた。だがその東大閥がクライであったし、また組織の創り方が全学連

官僚主義であり（中執がいちばんエライという思想）、細胞建設が基礎だという思想を持たなかった。法政の同志はこの批判に全員同意した（だが本多は東大型偏差値主義者の本質を六七年以降の激動期に暴露した。「アタマの悪いヤツは良いヤツの言うことを聞け」と平然と言う）。

本多とは、ブント創立大会の日に三月月ぶりに再会した（彼も私も創立大会に出席した。全学連フタクは合同反対派であり、討論するチャンスがあった）が、「卒論を書いていたんだ」とごまかして自分の悩みを隠す卑怯な態度に出た。その後もスパイ問題について心を開いて対話しようとはしないし、私の対話の努力にも応えなかった。私はここに全国委員会創立後の彼の活動スタイルの原点、困難にぶつかったときに、同志と胸襟を開いて対話して方針を選択・決定していく方法を採らない人格を見る。自分と対等の同志は存在しないという自己過信である。三・一四敗北死のハラワタを引き裂かれる失敗を反省して、彼はあの逃亡の三月月のあいだに、組織を創るにあたって自己の独裁を創る、他の誰にも心を開かぬと決断したと私は考える。「政治の人間関係は支配と隷属だ。それ以外にない」と彼は或るとき述べたが、それは彼の政治哲学であり、その思想こそ敗北死の原因である。

以上でスパイ問題にかんする探究派の歴史を終える。五九年四月に全学連第一四回大会でブントの唐牛健太郎が委

員長になり、革共同・関西派から指導部が移行してのちに、六〇年安保闘争は大衆的に発展した。関西派は残念なことに共産党・全自連と連合したために急速に勢力を喪失し、全国委員会はブント全学連との同盟で力をつけて瞬く間に関西派を凌駕していったのである。五九年十一月・二七の国会突入は社共指導部の制約をのりこえる可能性と力とを大衆的に示し、さらに六〇年一・一六羽田闘争、四・二六国会前チャペル・センター闘争で装甲車を乗り越え、六・四ストライキ支援闘争、そして六・一五国会突入闘争へと発展を遂げていく。

ブントは創立後短期間に四百名を全国で組織したという（前記島氏「ブント私史」五一ページ）。全国委員会はまだ数十名であったが、東京・関西で国労・動労の労働者を組織していたことが決定的強味であった。それは六・四ストライキで全学連が尾久機関区に支援動員したとき、当時清い青年活動家だった松崎明の素晴らしいアジテーション（日本の社会主義のために共にたたかおう）で広く認識された。

総括のポイントとして、何故ブントは素晴らしい闘争を組織しながら、安保自然承認のちに大会で分解したのか、それについての全国委員会の総括（本多延嘉編著『安保闘争』現代思潮社 六〇年）の現時点について、私の見解を述べることにしよう。

本多延嘉の六〇年ブント批判と黒田組織論

六・一五国会突入闘争における樺美智子さんの死は、三十万人を越える国会デモ参加者に大きな衝撃と共感を呼んだ。社会党は臨時中央執行委員会を招集、全学連の闘争が正当なものであることを確認した。また国民会議は、日共を除く満場一致で支持を決定した。国会へ、国会へとデモはつづいた。そして六・一八自然承認の日、数えられぬ数の人々が国会をとりまいた。この日の「闘争は、何ものも大衆を統一的に捉えていないという、混沌のなかでむかえた」（本多延嘉「民主主義の危機とプロレタリア運動」『安保闘争』一七六ページ 現代思潮社 六〇年）。つづいて彼はブント『戦旗』を引用し十八日にも国会突入すべきであった、していれば情勢は一変して「政府危機から政治危機を生ぜしめ……革命的危機への転化もまた不可能ではなかった」と主張するブントを批判する。

ブントが六〇年安保闘争の直後の総括大会で分解・分裂したのは、たしかにここで指摘されているように、安保闘争がほとんど間をおかずに革命に直結すると考えた安易さにある。私も六〇年五月頃に島氏に会った際に彼は、「全国委員会のような小さいヤツは相手にしない。自分はいま総

評をバクすることを考えている。二・三年で成功する。そして「革命だ」と述べた。失礼で思いつた態度とその安易さに驚いた記憶が鮮明である。彼は先の『ブント私史』でも率直に六・一八当日の自分の気持ちを述べている。「六月十八日夜、条約自然承認の時間が過ぎていったとき、側にいた生田が吐きだすように呟いた『ブントも駄目だな』との言葉は、私のなかでも次第に強くなっていった」（八六ページ）。こののち大会の総括論議に失望した島氏は、ブント再建の意欲を失い政治生活から去っていく。

島氏のこの態度はブントの展望喪失を示しており、多くの他の人も「革命に直結しない」現実で失望して戦列から去った。法政のブントを見ても六月を過ぎるとほとんどいなくなつた。このとき全国委員会は本多・北川・山村の三人の執筆による『安保闘争』をいち早く刊行して総括と展望を明らかにし、思想的優位性を現実化していく。ベストセラーになつたこの著作で本多は、六・一八の情勢にたいして「もし、『あのとき……であつたら』と「超主観主義的に願望するのではなく、『プロレタリアートが小ブルジョアの綱領のためにたたかう、この逆説を転倒するものこそ……革命的プロレタリア党のための闘争』（二六二ページ）と主張する。この著作全体がこの主張のために執筆されたと言つてよい。

たしかにブントの六〇年安保闘争が革命的情勢に直結し、年夏の全学連大会に出席した九大議員約十名と討論をおこない、基本的に一致を得た。このように守田先輩の努力なくしてブント戦旗派との連合の方向はあり得なかつた。だが黒田は五八年の自己の非同志的態度を棚に上げて守田先輩のブント移行を裏切りとして彼に復讐し、指導部から排除し本多も追隨した。これはブントの破産という否定しがたい状況のもとで、全国委員会の僅かの優越性を拡大して黒田独裁を創出したことがらであつた。

その独裁の創出には黒田組織論の「無謬性と唯一前衛党主義」理論が役割を果たした。黒田組織論は最悪のスターリン主義組織論であり、反スターリン主義はひとかけらも無い。この理論こそ、革共同（中核派も革マル派も共に）をスターリン主義に先祖帰りさせた最大の原因である。中核派にあつては、革マル派と激しく内ゲバまでたたかいたがらも、批判できない。自称六回大会で黒田哲学の批判を「完膚なきまでに遂行した」と自慢しているが、黒田哲学について執筆者本人も分かつていないことが歴然とする難解な作文だけで、組織論については批判しようともしない。この組織論こそ自滅への途である。

この「党のための闘争」の主張は、革共同が六一年のブント戦旗派（ほとんど全部）とプロ通派（少数の指導者のみ）を吸収したとき、最大の力を発揮した。そもそもブント戦旗派が接近してきたのは、守田先輩が九大細胞のたたかいを基盤として、ブントのいわゆる大衆運動主義を批判し革命党建設の路線を強烈に主張し、大きい力を得たためである。全国委員会指導部は、六〇年安保闘争総括の六〇

黒田を否定しレーニン主義党組織論の批判へ

ではその黒田組織論とはいかなるものか。『組織論序説』について見ることにしよう。最大の誤りは、党の第一の前提条件として共産主義的人間の形成をあげていることである。第二に戦略戦術の正しさ、第三に統一戦線戦術、第四に内部理論闘争（同書二二六ページ以降）である。この共産主義的人間の形成に黒田は独特の意味をこめる。すなわちプロレタリアの主体性の獲得である。それが階級闘争の中で自己変革ではなく先ず独立してとりあげられ、前提とされるところに黒田組織論の最大の誤謬がある。つまり黒田寛一が哲学的に考え出した「プロレタリアの主体性」を党員が獲得したのか否か、黒田寛一が判断するという意味なのである。ここから「人間の同一性の獲得」がやかましく言われて、党の独裁者が「まだオレと人間に同一になつていない」と恫喝する仕組みなのである。

スパイ容認の黒田が一体何をエラソウに言うのか。愚かしいにもほどがある。人間は決して同一性など獲得できない。生まれつきの性格の異質性が先ずあり、それに個人の生きてきた歴史の形成する人格の多種多様さがある。この多様な価値観を持つ人間が、政治と社会の矛盾に人間の怒りを感じて、たたかいに立ち上がる、その豊かさこそ尊いのであつて、同一性を主張することは貧しさの原因、組織の涸渇、徒党への転落を意味する。精神医学で説明されているが、人間はさまざまな理由から一つのことになつた

ないので、簡潔に要点のみ指摘する。

第一に外部注入論である。労働者階級はせいぜい労働組合主義にまでしか意識は発展しない、ブルジョア・インテリゲンチヤのみが社会主義学説を創造する。労働者の自然発生性にたいして目的意識性をもって階級の外部から社会主義的意識を注入することこそ、革命党の役割である。レーニンはこう主張する。だが一九〇二年「何をなすべきか」で主張されたこの論理は、一九〇五年ソヴェトの労働者階級自身による創成によつて、すでに否定されている。ソヴェトの出現にたいしてポリシエビキ・ペトログラード市委員会は、「ソヴェトがポリシエビキ党に従わないなら破壊すべし」と公然と声明した。レーニンは多少柔軟ではあつたが労働者の自治機関とか戦闘組織とかの評価のみで、ただの一度も革命権力の萌芽とは評価していない。ソヴェトを権力機関の萌芽として育て上げたのは、当時中間派であつたトロツキーである。ここにレーニン主義党組織論は、破壊していることが鮮明である。

また一九一七年全期間をとおしてロシア革命の最大の内容となしたのは、全国にわたる農民の自発的な領土の打倒と土地の社会化である。これによつてツァーリズムは権力基盤をガタガタにされてきたからこそ、ポリシエビキの十月クーデターがトロツキー指導で可能になつたのである。レーニンの一七年の文章・演説を眼を皿にして読んでも、

反応をすることは昔から知られている。こんな人間についての無理解をさらけ出して、おのれの独裁を創り出そうとするのが黒田組織論である。それは、個性抹殺の機構として前衛党を創り出し、指導部の独裁→個人独裁を必然化して、同志の創意性と自発性をゼロにしていくヌターリン主義である。

それゆえそれは、「自己批判の哲学」にはかならない。三頭政治時代に一九二四年・ポリシエビキ党第十三回大会でジノヴィエフがトロツキーに向つて「党がすべて正しいとここで宣言し、自己の見解を捨てよ」と強要したが、クループスカヤが「そんなことは心理的に不可能」と反対して代議員多数の拍手で否定されたのが、悪名高い「自己批判」である。このとき否定されたのが、のちスターリン独裁が成立するにともない反対派を征伐する最悪の武器として自己批判が強要され、ほかならぬジノヴィエフが最も苦しめられた。それは党員の考える力を奪い、指導部に無批判的に追従することをもつて優れた共産主義者と評価する、組織の創造性・自発性を抹殺する人格破壊の最悪の方法にほかならない。

黒田が明言しているように彼の組織論は、レーニン主義党組織論を基礎としている。だから黒田組織論を根本的に否定するためには、レーニン主義党組織論を徹底的に批判する必要がある。この課題はここでは詳説するスペースがない。この農民革命の素晴らしい社会変革に一言も言及していない。レーニンはたとえ農民革命が勝利しても自分の党が指導していないと自然発生性でレベルが低いと侮蔑して、目的意識性の名のもとに農民革命を超主観主義的に社会主義に高めるといつつもりで戦時共産主義期に圧殺し農民を虐殺した。一九一八年には三十の県庁所在地のうち十九もメンシエビキとエスエル左派がソヴェトを選挙で掌握、憲法制定会議でエスエルが四〇%もの得票率で最大多数を獲得した。しかるにポリシエビキは制定会議そのものの破壊に乗り出し、「民意を無視しても指導を貫徹する。大衆は愚かだから民意に従うと社会主義にならない」とレーニン主義党組織論の外部注入論を押し通した。民意を無視しても指導せよ、ここにレーニン主義の労働者階級無視がある。中央集権制と規約第一条とは、それを貫徹して党指導部の独裁を実現するためのシステムにはかならない。

そもそもレーニン前衛党とは、プロレタリア独裁期だけでなく、社会主義さらに共産主義社会まで労働者・市民を指導するために永遠に存続する権力党である。レーニンは『国家と革命』で国家死滅の崇高な理想を説きながらも論理が破綻し、事実上国家の永遠化に陥つた（志摩玲介「市民社会と労働者・市民革命」『年誌』第二号）。私はそれはレーニンの頭脳では、前衛党は国家ではなく社会団体であり、社会主義社会に存在しても矛盾とは考えなかつたため

と理解している。

マルクスのな共産主義者の党は、前衛党とはただの一度も表現されていない。「共産主義の政党は他の労働者諸党派に対立する特別な党派ではない」(「宣言」)。その党は労働者の大衆的運動に火をともし役割を果たすが、労働者大衆によって乗り越えられる存在として考えられており(「第一インター」のいわゆる分裂一八七二年 全集第一八巻二九ページ)、革命の勝利の瞬間には全労働者が党を乗り越える(「ザスリツチ」への手紙 一八八五年四月二十三日 全集第三六巻)。永遠の権力党としての前衛党という思想は、「労働者政府樹立のその日から国家滅亡の努力」を開始し、国家の社会への再吸収(「フランスの内乱」)を主張するマルクス思想とは無縁である。

黒田組織論は、冒頭に述べたように五〇年分裂でのスターリン主義組織論の反省の欠如とレーニン主義・スターリン主義の歴史と党組織論の無知の上でのみ成立しているシロモノにすぎない。黒田独裁を創出した「自己批判の哲学」とする黒田組織論は、ブント残党のごとき中間主義者と真面目に討論なんかしておられるかという思想と態度とをブントから加盟した清水ら学生指導部の中に充満させ、六一年全学連大会における関西ブントなどにたいする内ゲバとなつた。これが事態の本質である。レーニン主義党組織論こそセクト主義の基礎である。だが六一年にかかる関西ブント

冒頭に組織の原形質ということがらに言及した。黒田寛一は、ハンガリア革命の賞賛とマルクス『経済学・哲学草稿』の人間主義の復権において創成期的功績を持つ。しかしその組織論は悪質なスターリン主義組織論であり、最悪の結果をもたらす原因となつたのである。まさに組織論こそは組織における人間関係を律する理論であり、私たちは「個の自立・自立した個の結合」をかかげてレーニン主義・スターリン主義の「共産主義者は組織の歯車」論を克服していかなければならない。現在の新左翼諸グループの個々の分野での活動を友好的に連合しつつ総合していくとすればその途は、この立場であり、さらに共産主義運動史・ソ連史の全面的再検討、農業問題と民族問題の理論、国家論・組織論の再建が必要である。

『資本論』に無理解な黒田寛一

最後に黒田寛一が『資本論』に無理解であり、スターリン主義と同一の低水準であることを批判する。それは次の点に象徴的に現れている。

宇野弘蔵は、五二年スターリン『ソ同盟における社会主義の経済的諸問題』における『資本論』破壊に公然と批判を展開した世界でもただ一人の先駆者であつた。「価値法則

の排除によって発足したマルクス主義学生同盟(革共同・全国委員会の学生組織)主導下の全学連は、翌年末からの革マル派の分裂によって僅か一年半しか持たなかつたのである。ここにセクト主義の運命がある。

革共同の六一年ブント吸収のセクト主義による失敗は、三派全学連の歴史においても繰り返され、悲惨な解放派・ブントにたいする中核派の内ゲバとなつて学生運動そのものの解体をもたらす。それについては別の機会に論じるが、ここで明言できることは、「革共同の組織創成は企画として失敗した。探究派の初発において、六一年ブント吸収において明白だ」ということである。私は本多延嘉の七五年三・一四の無残な敗北死を三十年余考えつづけてきて、その原因は独善的な彼の独裁を赦した組織論にあると結論を出すにいたつた。

守田先輩には二〇〇一年六月に三十年ぶりに再会し、余りにも長かつた無沙汰を謝し、中核派の総括を創立の時点にさかのぼつて自己切開していくことを約束した。これはその第一歩である。私はブント吸収直後に政治局から三カ月事実上排除される屈辱を受けた。本多の五八年後半の逃亡への批判と、守田先輩との関係に猜疑心を抱いたらしい。私は黒田・本多独裁の結果として六二年末からの革マル派分裂を赦したことを、ここにすべての事実を明るみに出すことによつて明白にしたい。

は商品経済の法則。資本主義の法則は剰余価値法則」という捏造をおこない、ソ連スターリン主義の三十年にもわたる「社会主義建設」が価値法則を止揚することに完全に失敗した事実をごまかすために、価値法則を商品経済の法則に貶めて、「社会主義は成功した」とデマゴギー理論をふりまいたのである。しかし宇野弘蔵は労働力の商品化を資本主義の基本的矛盾と捉えるマルクスの立場から敢然とスターリンを批判した。だが他の経済学者はすべてスターリンに無批判的に追従した。

注目すべきは黒田寛一も「経済学と弁証法」論文でスターリンを支持し、「スターリンの問題意識に学べ」と言明したことである。そして昨年亡くなるまで終生彼はこのスターリン支持の立場が何故誤りなのか、理解し得なかつた。つまり彼は『資本論』を、梯明秀「経済哲学」の低級な敷衍でいくつかの術語の解釈をいじくるだけで、宇野弘蔵が五〇年代初頭に『経済原論』『恐慌論』を刊行し、マルクスが残念ながら未完成に終わった資本論体系を完成させた巨大な意義を理解していない。宇野弘蔵の価値形態論と価値実体論との先後関係にかんする『経済原論』の論理についても、それが貨幣の止揚のため社会主義にとつて最大の重大性を持つことを黒田は理解せず、スターリン主義と同じである。

黒田寛一は『資本論』は一巻だけでいい。何故ならオレ

も二巻・三巻は読んでいないからだ」と放言するような不勉強であった。私は五八年三月に黒田に最初に会ったとき、彼の反帝・反スターリン主義とマルクス主義復権に魅力を感じて探究派に加盟した。しかし一年後くらいにこの放言を聞いて「一体なんという傲慢で浅薄な人か」と愕然とした。中核派の指導部では、私だけがこの点で黒田寛一を批判した（『最前線』八五号 山村論文 六九年）。黒田はスターリン主義からまったく脱却できなかったのである。

ソ連崩壊を真摯に全面的に捉えてマルクス主義の知的刷新を志すのか、それとも象皮感覚で過ごすのか、ここに分岐点がある。

二〇〇七年四月